慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	助詞「まで」と閉包の操作
Sub Title	La particule MADE et l'opération d'adhérence
Author	芦野, 文武(Ashino, Fumitake) 伊藤, 達也(Ito, Tatsuya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2024
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Keio University Hiyoshi review. Language, culture and communication). No.56 (2024.) ,p.1- 11
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20241231-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／ This content is protected by the Japanese Copyright Act

助詞「まで」と閉包の操作

芦野　文武*
伊藤　達也**

1. 導入

本稿は，日本語の助詞「まで」が発話文の中で多様な（しかし無秩序ではない）意味を生じさせるメカニズムの統一的記述を試みる[1)]。

本稿ではまず，「格助詞」や「とりたて助詞」などの品詞属性を超えた「まで」の意味的同一性（identité sémantique）の仮説を提示する。そこでは「まで」がマークする心的操作（opérations mentales 後述）の仮説として，トポロジー的表象を用いた，領域・集合の「閉包（adhérence）」という概念を提案する。次に，「まで」が発話文の中で関係付ける２つのターム X と Y の関係性を記述する。最後に，「まで」の意味的多様性が，閉包との関係でどのように構築されるのかを，成句表現も含めた例文を分析することで示す。意味を「まで」が含まれる発話文が聞き手の心に生じさせる表象（représentation）と考えると[2)]，その多様性（variation）は，「まで」の意味的同一性と，それに関係付けられる諸要素（語彙あるいはコンテクスト上の異質的な要素）との相互作用による構築のメカニズムとして記述できることを示すのが目的である。

*慶應義塾大学文学部仏文学専攻　**名古屋外国語大学外国語学部フランス語学科

1)　本稿は 2023 年 10 月 6 日にフランスのトゥール大学で行われた，Colloque International “Frontières-Frontiers and Borders”において，Fumitake Ashino & Tatsuya Ito, « Description de la particule MADE (“jusqu’à”/”même”) en japonais contemporain: la frontière et ses interprétations variées »，というタイトルで口頭発表された内容を論文化したものである。口頭発表に対して有益なご意見を提供してくださったSylvester Osu, Jean-Jacques Franckel, Hélène Chuquet, Jean Chuquet, Sarah de Vogüéの諸氏に感謝する。

2)　この意味の定義はCulioli（2002）に依っている。

2. 「まで」の仮説に向けて

2.1. 先行研究

先行研究において，「まで」はおしなべて，格助詞としての用法と副助詞（あるいは「とりたて助詞」）としての用法を分けて記述されることが一般的である。

格助詞「まで」と副助詞（＝とりたて助詞)「まで」の違いについて，日本語記述文法研究会，（以下「日文研」2009a：62）は「とりたて助詞の「まで」は，前に来る名詞が想定される範囲の中での極限の存在であることを意味するが，格助詞の「まで」には，そうした評価的な意味はない」と述べている。辞書類においても同様で，例えば『明鏡国語辞典』（以下『明鏡』）も，「まで」の用例を，格助詞と副助詞に大きく分類し，それぞれの下位分類を設けて記述している。

沼田（2009）は，とりたて助詞の他に「格助詞，順序助詞，助動詞等」を区別し，「これらはとりたて助詞「まで」とは統語論的，意味論的特徴が違う」と述べている。（沼田 2009：161）

他方，寺村（1991：123）は「まで」の意味について，「「X まで P」では，X と P が結びつく名詞の集合の中の，中心から最も離れたところにあるという含みを持たせつつも，そのメンバーとして捉えられている」という仮説を提案している。

本稿は，「まで」を，その品詞属性によりあらかじめ分類することはせず，「まで」の諸用法を通じて見出される意味的同一性の記述を提案する。さらに，その意味的同一性が，出現する環境において関係付けられる諸要素との相互作用の結果，意味が多様化するという仮説に基づき，「まで」の様々な意味・用法の分析を試みる。

2.2. 「まで」による領域・集合の閉包

今述べたように，本稿の最初の目的は，「まで」の諸用法を超越した意味的同一性を探ることである。したがって原理的に，「まで」の意味的同一性は，この助詞に品詞属性が生じる前の段階に求められることになる。品詞属性は，発話文（énoncé）中の他の要素との関係における当該語彙の統語的役割を示すものであるから，「まで」の意味的同一性は，「まで」と他の要素との関係性が生じる発話文（énoncé）のレベル（Culioli の言うレベル 2[3)]）に先立つ心的操作（opérations mentales）のレベル（Culioli の言うレベル 1）に根拠を持つことになる。これら 2 層のレベルの関係は以下のようにまとめられる。

3） Culioli の発話理論の仮説では，レベル 1 の心的操作は，その痕跡の連鎖としてレベル 2 において観察可能となり，それを媒介として，レベル 3 においてメタ言語的に表象（＝仮説構築）される。cf. Culioli（1990, 1999, 2018）

レベル 1（心的操作・抽象的）→レベル 2（テクスト・物質的）

付言すると，レベル 1 における抽象的な心的操作（＝「まで」がマークする心的操作）は，レベル 2 において生じる具体的意味，例えば「まで」であれば「限界」「範囲」「到達点」「期限」「最終手段」「意外性」など，その都度聞き手の心に生じる表象のどれにも対応しないが，その全てに通底する抽象的形式のことである。

では具体的に，どのように考えれば「格助詞」と「とりたて助詞」の両方に通底する「まで」の意味機能を記述することができるだろうか。まず以下の 2 例から考えてみることにする[4)]。

（1） シャボン玉が屋根まで飛んだ。（格助詞）
（2） 台風で屋根まで飛んでしまった。（とりたて助詞）

（1）と（2）においては，「まで」の品詞属性はそれぞれ異なり，意味も異なっている。しかし，（1）と（2）のどちらの場合も，「まで」は，日文研（2009a）も指摘する通り，「屋根」がある種の「限界」または「極限」であることをマークしているという点では共通している[5)]。

（1）の「シャボン玉が屋根まで飛ぶ」では，「まで」が標示するタームである「屋根」は，ここでシャボン玉が弾け，飛ぶことを終えた地点であることを示している。したがって「屋根」はシャボン玉が飛んでいき，到達したその移動の「限界」を記すタームである。言い換えれば，「屋根」はシャボン玉が飛ぶことを終わらせる点として機能するタームであり，より抽象的には，「シャボン玉が飛ぶ」というプロセス，「飛ぶ」という行為が実現する領域を閉じるタームであるとも言える。

他方（2）の「台風で屋根まで飛んでしまった」は，いろいろなものが風によって吹き飛ばされることが考えられる中で，頑丈に固定され，吹き飛ばされないと思われていた「屋根」さえも飛んでしまったことを意味している。つまり，この発話者の頭の中で構築されうる物体の集合からすると，通常であれば，「屋根」はその集合の外側（飛ばないもの）に位置付けられている。しかし普通の風よりも強い台風が来たために，屋根が吹き飛ばされるのを見た発話者は，驚きと共に，「屋根」を風で吹き飛ばされるものの集合の内部に組み入れたのである。抽象的に言えば，「風に吹き飛ばされうるもの」（＝洗濯物，立て看板，ポスター等）の集合を，「屋根」をその境界にある要素として閉じる，あるいは「屋根」を集合の中心から最も遠い要

4） 以下，例文に出典がない場合は，すべて著者による作例である。
5） 日文研は，「このほかにも，何らかの度合いを表す名詞につき，述語で表される動詞・出来事の及ぶ到達点を表す」として次の例を挙げる。「気温が 38 度まで上がった」（日文研 2009a：61）「合格点まで届かなかった」（*ibid.*）。これらについても比喩的ではあるものの，ある数値への到達と解釈できる。

素としてその集合を囲い込む，と言えるような機能をもっているのである。そこには固定性が強いと考えられる「屋根」以外のものは全て吹き飛ばされても当然という言外の意味もある。

以上を総括すると，品詞属性は違っても，「まで」はある活動や，それが展開される領域，あるいは抽象的な集合を「閉じる」性質を持っていると考えられる。そして意味として聞き手が感じる「限界」や「極限」，「意外性」，「驚き」などには「閉包」の操作が抽象的な水準で常に存在しているのである[6)]。

この「閉じ・包む意識」を確認するために，「まで」と「に」を比較してみよう。

(3)　新幹線で東京まで行く。
(4)　新幹線で東京に行く。

(3) では「東京」が「まで」によって，「新幹線で行ける」場所の「限界点」であることがマークされ，「まで」は「新幹線で行くこと」を「閉じる」「終了させる」機能を持っている[7)]。それに対し (4) では，「東京」は「新幹線で行く」ことの「目的地」ではあるものの，新幹線での移動という活動の範囲を東京によって「閉じる」働きは見られない[8)]。

また，次の (5) と (6) が示すように，「まで」が標示するタームは，述語との関連で構築される集合を閉じる最後のタームでなければならないために，複数のタームを指定することができないという制約も観察できる。「に」にはそれがない。

(5)　*私は映画館と銀行まで行った。

---

6)　本稿は，とりたて助詞の「まで」に見られる「評価」(cf. 日文研 2009a) は，集合構築とその閉包による集合の限定に際しての発話者の介入の結果だと考える。同様に沼田 (2009) の「動作の到達度」と「到達点として捉えた事物に対する意外性」の区別についても，品詞の違いを分ける基準というよりもむしろ，意味構築の結果であるとする立場をとる。

7)　「この映画は東京でしか公開されないので，わざわざ新幹線で (地方から) 東京まで見にいく」のような場合は事情が異なる。この用例は，とりたて助詞的であり，東京が映画を見に行ける範囲の土地の限界・極限とする集合が作られているのである。つまり常に，「Xまで」がある場合，発話者はXを「極限＝外との境界」とする集合を作り，それを極限値Xでもって閉じていることを「まで」によってマークしているのである。

8)　本稿では詳しく分析できないが，トポロジーの観点から定義すれば，助詞「に」は「外部性」をマークしていると考えられる。この「に」の外部性はテクストのレベルでは，起点と着点を表せる両義性となって現れてもいる。例えば「太郎に本をもらう」「太郎に本をあげる」のいずれの場合も，レベル1 (心的操作のレベル) では，「に」は，X (「に」でマークされるターム) が，Y (述定関係) の外部に位置していることをマークしていると考えられる。尚，我々の格助詞の研究においては，「に」の意味的同一性を，Yに対するXのステータスの観点から，XがYの「基準」として標示されるとしたが，トポロジー的観点も考慮に入れるならば，XはYの「外的な基準」として記述できる可能性がある。

（6） 私は映画館と銀行に行った。

他方，「まで」は「から」（＝この場合「起点」を表す）を伴って使用されることも多いが[9]，その場合は，領域の範囲の指定であり，この閉じるという役割が際立ってくる。以下の例がこのことを示している。

（7） 揺り籠から墓場まで
（8） 入学から卒業まで

（7）において「墓場」は，「揺り籠」によって開始された「人の生きる時間」を閉じる役割を持っている。「揺り籠」が人生の時間の流れの入口となりそこから始まった走査（parcours）があり，「墓場」が終点としてその空間を閉じることで「一生」という範囲が確定するのである[10]。（8）は「学生時代」を意味するが，同じようにその起点となる入学と終点となる卒業により走査が閉じられることで，1つの期間が切り取られ構築されているのである。

最後に「まで」が数について用いられる例を考える。

（9a） 10まで数える。
（9b） 10数える。
（10a） ？レフェリーが10まで数える前に立ち上がれば，KOではない。
（10b） レフェリーが10数える前に立ち上がれば，KOではない。

（9a）は「数える」行為が「10」を限界として終了することが数え始めから予定されている。（9b）の「10数える」は，コンテクストが明示されていない場合，（9a）とほぼ同じような意味に解釈できるが，（10a），（10b）を見ると違いが明らかになる。（10a）の「10まで数える」がやや不自然なのは，ボクサーが途中で立ち上がり，ファイティングポーズをとる可能性があるにも拘わらず，初めからレフェリーが10カウントすることをあたかも予定しているかのように解釈されてしまうためだと考えられる[11]。

9） 沼田（2009）では，この用法の「まで」は「順序助詞」とされている。

10） 「から～まで」と「から～にかけて」は等しく期間を表すとされるが，「まで」の方が範囲を確定している意識が強いのは，まさに「まで」のもつ，閉じ包む心的操作によると考えられる。「から」は走査の入口のマークとして領域・期間（＝集合）を開始し，「まで」はその終点としてそれを閉じる。（a）「正午から夕方まで強い雨が降るでしょう」，（b）「正午から夕方にかけて強い雨が降るでしょう」では，（b）の「かけて」では終点がぼかされていることが（a）との比較により明らかである。

11） 逆に，「10まで数えてからお風呂から出てね」において，「まで」を取ると奇妙になるのは，10カ

3. 「まで」の意味的同一性の仮説

以上，「まで」の核に相当する操作として，「まで」が標示するタームによって，動詞が表す移動や範囲を「閉じる」という心的操作が抽象的には常に存在することを見た。これは何らかの抽象的・形式的な操作の痕跡となっていると考えられるが，それを「まで」の仮説として以下のように提案したい。

「まで」の仮説：「X まで，Y」という構造において，「まで」は，述語 Y との関係で構築される領域・集合を，X を境界（限界）として閉包（adhérence）することをマークする。

この仮説について補足説明を簡単に加える。「閉包」（adhérence）とは，トポロジーの概念であるが，ここでは読んで字の如く，ある集合を閉じ包む操作と考えて良い[12)]。X は「まで」に前接する語彙要素であり，後接する述語 Y との関係で構築される集合の「境界」は，現実世界においては，知覚的，空間的，時間的，心理的境界として，「到達点」，「範囲」，「限界」，「意外性」（cf. 沼田 2009）など多様な意味に関係づけられる。

3.1. 意味の多様化の説明に向けて

品詞属性が生じる前のレベルであるレベル 1 において，「まで」がマークする「領域・集合の閉包」という操作は，発話文であるレベル 2 において，その抽象的な形式性を維持しながら，発話状況・コンテクストの中でさまざまな値の付与を受ける。この具体的な値の付与（instanciation）の結果が，意味的多様性が生じる原因であると考えることができる。この意味の多様化は，従って，根本的にレベル 2 に属する現象である。それに対し，語彙要素の意味的同一性はレベル 3 でメタ言語的に再構築されるものである。

先行する我々の格助詞の研究では，格助詞は「関係辞（relateur）」として，X と Y を関係付

ウントすることを，風呂を出る条件として予定しているためである。

12) 口頭発表時に，Jean-Jacques Franckel 氏より「まで」がマークする心的操作を，帰属（appartenance）というタームでも表現できるのではないかという提案を受けた（cf. 寺村（1991）の仮説も参照）。確かに閉包は X を Y に帰属・加入させる操作を含む。しかし「閉包（adhérence）」は，Y との関係で構築される集合に入っていなかった X をそこに帰属させることに加えて，その加入を最大限の広がりとして，Y との関係で構築された集合を拡張し，かつそれを閉じるという複合的な操作である。この複合性を表象するため，ここでは「閉包」というやや馴染みのないタームを保持している。直感的なレベルでは，「まで」の意味的同一性として，一方では，Y との関係で構築された集合への X の「帰属・加入」，他方では，Y との関係で構築された集合の X による「閉鎖」，その結果としての Y との関係で構築された集合の拡大，が心的操作のイメージである。

けると仮定しており（芦野・伊藤 2022，伊藤・芦野 2022），その観点から，X と Y との関係性の違いに基づき，「構築」「特定化」「補完」の 3 分類で意味的ヴァリエーションを類型化している。格助詞の意味の 3 分類は，X と述定関係 Y との間の関係の観点から構想されているが，「とりたて助詞」については，主体の評価，集合の観点を導入する必要が出てくる。以下その問題に関して考察する。

3.2. 「集合」の構築と「限界」の解釈

（11） シャボン玉が屋根まで飛んだ。（格助詞）［＝（1）］

（12） 台風で屋根まで飛んでしまった。（とりたて助詞）［＝（2）］

「まで」の意味的同一性を記述した 2.2. では，「まで」が，「格助詞」と「とりたて助詞」のいずれの用法においても「限界」を表すという共通点を強調したが，同じ例を再び取り上げ，ここでは両者の差異に注目する。まず初めに，この 2 つの「屋根まで飛ぶ」をどのように差異化できるかを考えてみたい。

（11）と（12）では，「屋根」（X）が「限界」を表すということは一致していても，「何の限界」なのかということが異なっている。

端的には，格助詞としての「まで」は定義上，動詞との強い結びつきを持っているために，「屋根」（X）は，動詞「飛ぶ」（Y）の限界となると考えられる。それに対し，とりたて助詞の「まで」は，「風に飛ばされうる物」という集合の限界と考えられる。つまり，ここで「限界」とは，ア・プリオリには，集合の外にあると考えられていた要素（「屋根」）を，集合の限界として，内部に組み入れることで，集合を限定することである。そこから，発話主体による「意外性」の評価が出現する。次の例も同じように分析が可能である。

（13） 戦争中は木の根まで食べた。

この例において，「木の根」（X）は「食べられるもの」の集合の内部の限界にある要素と解釈できる。これは，普通は食べない（集合の外にある）「木の根」を，戦争という例外的な状況ゆえに，限界値として食べるもの（集合の内部）に組み入れていることになる。この場合，「木の根まで」は実質的に「食べられるものならすべて」を意味している。

以上をまとめると，「まで」が「格助詞」として解釈される場合は，X は述語 Y との関係を中心に構築されるが，「とりたて助詞」として解釈される場合は，X は述語 Y との関係で構築されることに加えて，集合の中で X が限定されるという機能が付加されることになると言える。しかし，「格助詞」と「とりたて助詞」はそれほど明確に区別できるわけでなく，あくまでも連続的なものであると考えられる。例えば，（11）の例文に特定のコンテクストを加えた

（11’）では，集合の中でのXの限定に解釈の中心が移り，「とりたて助詞」としての解釈が優勢になるだろう。

（11’） シャボン玉がすぐ割れると思っていたのに屋根まで飛んだ。

4. 集合の閉包のいくつかのタイプ

最後に「まで」の「とりたて」用法に分類できると思われる成句表現をとりあげ，様々な解釈がどのように生じるのかを，集合の閉包のタイプの違いを元に考察する。

（14） 電車がなければ，歩くまでだ。（『明鏡』）
（15） たかが試験に受かったまでのことではないか。（『明鏡』）
（16） この程度の怪我なら，医者に行くまでもない。

（14）の「ル形＋までだ」という構文において，「歩くまでだ」は，移動手段の集合の選択肢として，「歩く」（X）以外の選択肢が残されていない状況を前にした話者が，Xを止むを得ず決定（選択）することを表している。「電車がなければ」という条件節によって，予定していた移動手段が絶たれた状況が導入されることで，移動手段としては当初予定されていなかった「歩く」（X）が，例外的に最終手段として集合内に組み込まれた（閉包された）ことになるのである[13]。最終手段は，言い換えれば，残された唯一の手段ということであり，そこから，「歩くよりほかはない」，「歩くだけだ」のようなパラフレーズが可能であると考えられる[14]。この例においても，（12）と（13）の「まで」と同じく，ア・プリオリには集合の外にあるはずの要素が，集合の内部に閉包されるというメカニズムは共通している。しかし，（12），（13）では，集合を満たす他の要素に加えて，Xが例外的な要素として組み込まれるのに対して，（14）では，条件節が，移動手段の集合のいわば空疎化をマークしており，それを埋め合わせるために，止むを得ずXを集合の内部に組み入れるという操作が行われている点が異なると言える[15]。

13） この例のように，「ル形＋までだ」という構文はしばしば条件節を伴うが，この構文の意味構築にとって重要な要素となっている。

14） もちろんこれらのマーカーとの交替が常に可能と言うことではない。この用法の「まで」と「だけ」の違いを示す一例のみ取り上げると，先ほど述べたように「～までだ」には「X以外には手段がない」ということに由来する「やむを得ない状況」のニュアンスが結びついているため，そのような状況と解釈されない発話文，例えば，「やれることはすべてやったので，明日は一生懸命頑張るだけだ」は，「まで」を使って「？やれることはすべてやったので，明日は一生懸命頑張るまでだ」に置き換えると奇妙になる。

15） 『明鏡』はこの例以外にも「失敗したらそれまでだ」を挙げている。この例文の解釈の可能性の1

（15）では「まで」は「タ形＋までだ」という構文で現れているが，話者による評価の見直し／制限を表していると考えられる。ここでは，Xは集合ではなく，Xの評価に関わる範囲・領域と考えられる。この発話文は，先行する状況（共話者が「試験に受かった」（X）ことを誇らしいことだとする状況）に対する，話者の反応と解釈でき，「試験に受かった」（＝X）という事実に対する過大評価を，その範囲を超えない価値（＝単にXである）として捉えるべきだと主張していると考えられる。言い換えれば，Xにそれ以上の評価を与えようとしている共話者に対して，話者がXはそれ自体の評価の範囲を越えない／Xの範囲にとどまる[16]という主張を対立させているということである。したがって，「まで」は，Xそれ自体を範囲とする（閉包する）ことで，その外部（＝それを越える評価）を過大なものとして排除する役割を果たしていると言える。そこから，「試験に受かったに過ぎない」，「単に試験に受かっただけのこと」のようなパラフレーズが可能になると思われる。

最後に，（16）では，「まで」は「Xまでもない」という構文で現れている。日文研（2003：128）はこの表現について，「その事態が不必要なものであることを表すが，単に不必要であることを述べているだけでなく，それよりも簡単な別の行為で用が足りるという意味を含んでいる」という解釈を与えている。本稿の仮説に従って分析すると，X（＝「医者に行く」）は，「怪我に対する対処法」の集合のうちの最終的な対処法として想定されるが，それが「もない」によって否定されることで，その最終対処法を選ばずとも，集合内の他の対処法（例えば，「薬を塗って様子を見る」）にとどめておくことができるという解釈が生じると考えられる。「医者に行く」はある意味で「度を越えた対処法」であり，「までもない」はそれを過剰として排除する[17]（「医者に行くほどではない怪我」である）。これは閉包の逆の操作と言え，例外的なXを適切な対処法の集合の内部に組み込むのではなく，その集合の外へ放擲するのである。つまり，「までもない」という成句表現の中にも閉包は観察でき，それが「もない」により否定されることで「まで」の反対の意味効果が現れるのである。

以上の例文の分析により，閉包の構築はすべての例において同じように行われるわけではなく，一方で，集合・領域・範囲に対するXのステータスの違いによって，他方で，Xと文脈内の諸要素との関係によって，複数のタイプが区別できることが示唆される。3.2. で分析した例文も加えると，「まで」の「とりたて助詞」の用法には少なくとも以下の4つのタイプが区別

つは，「失敗したらもう他の機会はない／失敗したらそれで終わりだ」である。つまり，この例文では，（14）のように，ある要素の不在によって集合が空疎化された場合にそれを埋め合わせる最終的な要素（X）はなく，「それ」（X）自体が機会の集合の最終要素と解釈されると考えられる。

16）「たかが」というマーカーは，この制限の解釈を補強していると考えられる。

17） 日文研（2003）のグロスにある「不必要」性は，この過剰という概念と結びついていると考えられる。

できると思われる。

・ア・プリオリには集合の外側に位置づけられていたXが，集合を満たす他の要素に加えて，例外的要素として集合に組み入れられるケース（cf.（12），（13））；
・ア・プリオリには集合の外側に位置づけられていたXが，集合内の要素が空疎化されることで（cf. 条件節），例外的要素（最終手段）として集合に組み入れられるケース（cf.（14））；
・共話者によるXの範囲を超える評価の想定を，話者がXの範囲内の評価に制限するケース（主体間関係の対立があるケース）（cf.（15））；
・ア・プリオリには集合内に位置づけられていたXを，集合の外部に放擲するケース（cf.（16）.

5. 結語

本稿では，助詞「まで」の仮説を「Xを境界（極限）とする，述語Yとの関係で構築される領域・集合の閉包（adhérence）」とし[18]，この意味的同一性は，「まで」が「格助詞」とみなされる場合も，「とりたて助詞」とみなされる場合も，共通して見出されることを示した。また，「まで」が持つ様々な解釈が，この助詞の持つ意味的同一性と，この助詞が現れる文脈内の様々な要素との間の相互作用からどのように構築されるのかを分析した。最後に，先行研究では十分には扱われてこなかった「とりたて助詞」に分類されると考えられる成句表現を分析し，集合・領域の閉包には，複数のタイプが区別できることも示した。

〔附記〕本稿は，2024年度・慶應義塾大学学事振興資金（個人）の助成を受けて行われた研究成果の一部である。

参考文献

Culioli, A. (1990, 1999, 2018): *Pour une linguistique de l'énonciation*, tomes 1–4, Ophrys, Lambert-Lucas.
Culioli, A. (2002): *Variations sur la linguistique,* Klincksieck.
芦野文武・伊藤達也（2022）：「現代日本語における「から」の体系的記述に向けて」，『言語・文化・コミュニケーション』，54，pp. 1–21.

18） 日本語の手話において「まで」は右手の水平方向の動きを左手で止める動作で表される。この身振りにおいて，右手の動きがマークしている可能性の高い「走査（parcours）」という心的操作の重要性について口頭発表の際にSarah de Vogüé氏から示唆に富む指摘を受けた。本稿においては，Yに関連して構築される領域・集合内で進行する走査のオペレーションは，「揺り籠から墓場まで」等の例とともに論じたが，その他の，例えば「子供までデモに参加した」などの場合も，走査が集合の外縁にはみ出した結果とも考えられ，「まで」の仮説においては，「閉包」に加え，領域・集合の内部における走査という概念を統合しなければならない可能性がある。

伊藤達也・芦野文武（2022）:「現代日本語における「に」の発話意味論的記述」,『名古屋外国語大学論集』, 10, pp. 117–143.
北原保雄編（2021）:『明鏡国語辞典　第三版』, 大修館書店.
寺村秀夫（1991）:『日本語のシンタクスと意味 III』, くろしお出版.
日本語記述文法研究会（2003）:『現代日本語文法 4』, くろしお出版.
日本語記述文法研究会（2009a）:『現代日本語文法 2』, くろしお出版.
日本語記述文法研究会（2009b）:『現代日本語文法 5』, くろしお出版.
沼田善子（2009）:『現代日本語とりたて助詞の研究』, ひつじ書房.